

# 第2回 草津市総合教育会議 議事録

平成28年10月11日開催

草津市立教育研究所 研修室

出席者	草津市長	橋川 渉
	草津市教育委員会	
	教育長	川那邊 正
	委員	麻植 美弥子
	委員	杉江 由紀子
	委員	周防 直美
事務局	政策監	佐々木 亨
	総合政策部長	山本 善信
	教育部理事	中瀬 悟嗣
	総合政策部副部長（総括）	岡野 則男
	教育部副部長（総括）	居川 哲雄
	教育部副部長（街道交流担当）	八杉 淳
	企画調整課長	南川 等
	教育総務課長	太田 一郎
	生涯学習課長	増田 高志
	スポーツ保健課長	岸本 久
	文化財保護課長	藤居 朗
	図書館長	北相模 政和
	学校教育課長	時岡 善也
	学校政策推進課長	高井 育夫
	学校給食センター所長	宇野 秀樹
	こども家庭課長	山本 智加江
	松原中学校長	杉山 泰之

南笠東小学校教頭

教育総務課参事

鈴木 信之

松浦 正樹

テーマ 「平成28年度全国学力・学習状況調査における草津市の結果と課題」

1. 開会 橋川市長が平成28年度第2回草津市総合教育会議の開会を宣言
2. 学校政策推進課より、平成28年度全国学力・学習状況調査における草津市の結果と課題を説明。

#### 学校政策推進課長

全国学力・学習状況調査の実施目的は、「教育施策の成果と課題の検証」「学校での学習状況の改善に役立てる」「継続的な検証改善サイクルを確立する」という3点にある。

本年度は4月19日に実施され、調査対象は全国の小学校6年生と中学校3年生である。

本市では、小学校6年生は1,257人、中学校3年生は1,061人が対象となった。

調査問題はA問題とB問題があり、A問題は、基礎知識や技能を問う問題であり、B問題は、その知識や技能を活用出来るかどうかを問う問題で構成されている。

A問題、B問題のほかに児童生徒の学習意欲、学習方法、学習環境、そしてふだんの生活の様子を聞く85項目からなる児童生徒質問紙と、学校長が指導方法に関する取組を回答する114項目からなる学校質問紙の4種類がある。

まず、平成28年度の草津市全体の結果を、小学校・中学校別に報告する。小学校では全てにおいて滋賀県平均を上回っており、国語A、国語B、算数Bの3教科では、全国平均以上の結果となっている。中学校でも全ての教科で県平均を上回っており、国語A、数学A、数学Bは全国平均以上の結果になっている。

次に、平均正答率が80%以上、例えば問題数が15問だったら、12問以上正解した児童生徒を高位層とし、平均正答率が40%以下、問題数が15問だったら、正解数がゼロから6問の児童生徒を低位層とし、それ以外を中位層とした学力階層別の結果は、本市の小学生では、国語Aは高位層が50.7%、中位層が40.1%、低位層が9.3%になり、高位層が大変多い。国語Bは、高位層は29.0%、中位層は45.3%、低位層が27.6%になり、山なりの形のグラフをしており、正常的な正答率となっている。算数Aは58.2%が高位層、35.1%が中位層、6.8%が低位層であり、これも大変高位層が多く、よくできているという状況になっている。

ただ、算数Bについては高位層が4.7%しかおらず、中位層が54.6%、そして低位層が40.9%という結果になっており、正答率がさがっているが、全国的にも同様の傾向が見られる。また国語A、国語B、算数Bについては全国平均以上となっている。

中学校では、国語Aが49.9%とほぼ半数が高位層、45.9%が中位層、4.2%が低位層ということで、正答率が高い生徒が非常に多いということになる。国語Bについては、高位層が27.2%、中位層が55.0%、低位層が17.7%で、これは先ほどの小学校と同様、山なりの曲線になっている。数学Aについては31.4%が高位層、5

0.6%が中位層、18.1%が低位層で、国語Bに比べれば数学Aの方が高位層が多いが、数学Bに関しては小学校と同様の結果で、高位層が大変少なく5.8%、中位層が42.8%、そして低位層が51.5%と、非常に苦戦をしている状況である。

続いて質問紙調査から見えてきた結果について、全部で85項目の質問があるが、その中で「そう思う」「どちらかというと思う」という肯定的な答えがあった割合が全国平均よりも高い、または同程度の6項目をあげた。

小学校は「家で、学校の宿題をしている」「友達との約束を守っている」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」「朝食を毎日食べている」「学校で、友達に会うのは楽しい」「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」ということで、特に「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」という心の部分、また、学校生活を楽しみ、友達と一緒に遊ぶことに喜びを見出している児童が多いと分析している。

続いて中学校では、「友達との約束を守っている」「学校で、友達に会うのは楽しい」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」「朝食を毎日食べている」という、この5項目については、肯定的な回答が小学校と同じく多かった。また「人の役に立つ人間になりたいと思う」という質問に対して、肯定的な回答が多かったことは、これから高校進学、それから社会に出ていく中学生であるから、非常に喜ばしい結果であると思われる。

一方、改善していかなければならない点だが、草津市の小学生が「そう思う」「どちらかというと思う」と回答したうち、全国平均との差が大きかったのは、「家で、学校の授業の復習をしている」「家で、予習・復習やテスト勉強などの自学自習において、教科書を使いながら学習している」「算数の勉強は好きだ」「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」という4項目で、肯定的な回答が少なかった項目である。

同様に、中学生が「そう思う」「どちらかというと思う」と回答したうち、全国平均との差が大きかったのは、「4 総合的な学習の時間」では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」「中学1、2年生に受けた授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思う」「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」「読書が好きだ」という4項目であった。

### 3. 学校ぐるみの取組が成果につながった2校の事例についての発表

#### ① 南笠東小学校 鈴木教頭「学力向上の取り組み」

##### 鈴木教頭

本校の校長は常々職員に、「授業が変われば子どもが変わる、よい授業を目指そう」と機会あるごとに言っており、それに応えるように職員も一生懸命取り組んでいる。その一端を説明していきたい。

南笠東小学校は、全校児童416名、各学年2学級編成であるが、6年生だけが3学級、86名である。本校では学習態度は落ち着いているものの、基礎学力の弱さや家庭学習がやり切れない環境、また自ら進んで学ぼうとする意欲の低さが課題に挙げられている。

平成26年度全国学力・学習状況調査結果では、国語科では、「話すこと・聞くこと」、漢字の定着状況などは比較的に向上がしているものの、書く力や表現の技法などがしっかりと身につけていない状況が見られた。漢字の定着は、漢字検定等に一生懸命取り組んでおり、改善が図れているのではないかと思う。

算数科では、基礎的な計算問題や公式に当てはめて計算する問題は非常に力を発揮できるが、考え方を分かりやすく説明する力や図形のような空間認識を問われる問題に苦手意識が見られる。

全国学力・学習状況調査結果を分析し、子どもの側の強み弱み、指導者側の強み弱みを整理し、どのような取組を進めることが本校の子どもたちの学力意欲につながるのかを職員全体で話し合い、三つの視点で改善を進めていくことにした。

付けたい学力を「学ぶ意欲」と捉え、「関心・意欲を高めるための授業改善」「学びの意欲を高める環境づくり」「学びの基礎となる学力の向上のための家庭学習の習慣づくり」という三つの視点で全校的に取組を進めている。学んだことをどれだけ記憶し、また様々な議論をどれだけ身に付けるかということも大事であるが、もっと大事なことは学ぶということに対する期待や希望を持つこと、また、なぜだろう、もっと知りたいという高い関心や前向きな姿勢こそが結果的に学力向上につながるのではないかと考えている。本校の校長は、全校生徒が集まった際に、科学実験をして、子どもたちに興味を持たせたりしている。

まず一つめの取組である授業改善については、授業のユニバーサルデザイン化を図っている。1時間の授業の中でめあての確認、個人の思考、話し合い活動、まとめなど基本的な授業の進めかたを全校が共通して行っており、その中には特別に支援を必要とする児童にとっても分かりやすい板書の仕方や、書かせかたの工夫などもある。そのことが児童にとっても落ち着いて学べることにつながっている。

また、デジタル教科書の活用にも力を入れており、その一つとして、特に全体で話し合いたい場面を大型テレビで教科書の写真を大きく映し出し、子どもたちと考えるというようなことに活用している。また、空間図形のイメージしにくい部分を示すときなどには、

特に有効であると感じており、必要な場面の動画等も活用出来るので、考えをまとめるときなどにも活用できる。

また、話し合い活動の充実にも昨年度から意識して取り組んでおり、アクティブ・ラーニングを進めるためには、小集団での話し合い活動はとても重要である。話し合いの議論が未熟だと、活発な子どもの意見に流れられてうまく折り合いが付けられないため、低学年から話し合いの仕方を身に付ける指導を進めている。

このような話し合いの場面を取り入れた研究授業を公開し、職員が学び合う場をもっている。本校の校長先生は理科が得意であるので、4年生の理科の空気鉄砲の授業を担当の代わりに担当して、先生がたがそれを見て学ぶなど、いろいろな授業の工夫を共有し合っている。

二つめの学びの意欲を高める環境づくりとしては、授業の要点をまとめた掲示物を、子どもたちの目が届くよう教室に設置し、授業が終わった後や、新しい単元に進んだときに、また振り返れるような工夫をして、教室経営に力を入れている。

また、廊下経営にも力を入れている。本校児童は調査結果からも新聞やニュースなどへの関心が全国平均より低い状況にあるため、ことわざや熟語、新聞記事の拡大などを掲示し、定期的に貼り替えるなどして児童の関心を高めるように取り組んでいる。また、廊下にはガッテンプリントという、家庭学習に役立つプリントを置くことで、学ぶ意欲につなげている。学習したことがすぐ復習出来るよう、その日の学習に対応した家庭学習、教材を準備し、自由に持って帰れるように配慮している。

三つめは家庭学習の支援であるが、家庭学習がんばろう月間というものを実施している。本校では全国学力・学習状況調査結果から、家での学習時間が短いことや、テレビやゲームの時間が全国平均よりかなり長いという課題がある。また、子どもの置かれている状況により、家庭学習が十分でないこともある。家庭学習がんばろう月間を設定し、保護者に啓発するとともに、子どもにもテレビやゲームの時間を減らすよう意識付けを行った。この取組により、少しずつこの月間だけでも学習に取り組む時間が増えたので、今年度も11月にスタートする予定である。

また、家庭学習支援としては、金プリ15という取組も行っている。内容は、2週間に1回、隔週の金曜日に、書くことを中心にしたプリント教材を課題として、提出率100%を目指し取り組むというものである。5年生はレッツエンジョイシンキングという市の取組があるので、そのほかの学年も同じように、各学年に付けたい力を明示したプリントを作っている。

また、放課後学習教室という取組も行っている。学習支援が必要な子どもたちは保護者の送迎が期待できない子も多く、外部で良い取組があっても参加できないということで、本来は家庭でやられるべきことではあるが、4年生、5年生の希望者および援助が必要だと思われる生徒に声をかけて、放課後がんばろうという学習を進めている。指導は担任の負担とならないように、管理職と教務、少人数指導加配の教諭等で下校も付き添っている。

実施に当たっては、送迎の課題や指導者の問題など、クリアすべきことは多くあるが、この取組によって少しでも救われる児童がいるなら、という気持ちを込めて行っている。

最後になるが、「平成28年度の実践と今後の計画」ということで、今年度も、既に全国学力・学習状況調査の結果が出ているが、傾向としてはこれまでと同じように、書く力の弱さや基礎学力の弱さに課題が見られるものの、結果に一喜一憂することなく、将来につながる学ぶ意欲の育成に向け、これまでどおりの取組を更に続けていきたい。

## ② 松原中学校 杉山校長「学力向上に向けて～教科指導力からのアプローチ～」

### 杉山校長

全国学力・学習状況調査で全国平均を下回る状況を改善するため、調査結果の分析から、各教科で複数の教員が協働で授業を作りあげる取組を学力向上の方策の一つとし、3年前から英語科を中心に取り組み始めた。人的な支援をいただく中で、きめ細かな指導と教員の授業力向上という二つの視点から、この取組を各教科の可能な範囲で拡充していった。昨年度、数学Aが全国平均を超え、今年度は国語B以外が全国平均を超えており、ここ数年の取組の成果が表れてきたものと喜んでいる。

ここでは、本校の「G-OJT」による各教科の指導について紹介する。「G-OJT」は「グループによるオン・ザ・ジョブ・トレーニング」の略称で、グループとは教科部会のことである。本校には、国・社・数・理・英の5教科にそれぞれ3～4人の教員が配置されている。通常、教科担当者の全員が集まり、各学期に3回程度の教科部会を開くところである。そこを、学年ごとの教科担当者が日常的に協議し、ベテラン教員が持つスキルを若い教員に伝えながら、「わかる授業」を共に作りあげることで学力向上を図る取組である。

本校は、各学年4クラスの規模である。例えば、理科が週に4時間であれば、通常、一人の教員が4クラス全てを担当してその学年の授業を行い、別の学年は他の教員が担当するのが、この規模の中学校で概ね使われている配置形態である。それを、一つの学年を複数の教員でシェア（分け合う）し、お互いに複数の学年を担当し合うこととした。

国語科では、本校に4名の国語科教員がいる。一覧表で黄色の網掛けで表示している教員経験22年かつ本校勤務5年のベテラン教員が、3年生2クラスの担当の他に、「G-OJT」のグループリーダーとして、今年度の授業方針等を教科部会で国語科の全教員に助言等を行う役割を担っている。他の教科も同様である。

教員経験10年目、本校勤務3年目の中堅教員は、3年生の別の2クラスと、1年生の2クラスを担当している。

1年生の残り2クラスをシェアして担当しているのは教員経験3年目の教員である。

同学年をシェアする担当教員は、小單元ごとに、中心課題の設定や評価について、また使用するプリントやワークなど、細かい打合せを教科部会で行っていく。そのことによって、経験年数の異なる教員、特に経験の少ない教員のスキルアップをねらいの一つとし、授業力の向上につなげている。



また、校内の授業以外の担当業務の関係で、2年生は一人の教員が全クラスを担当している。経験2年目の教員であるが、前述の授業に関するアドバイスを「G-OJT」のグループリーダーや先輩教員から受け、デジタル化した共通教材を共有して活用し、実践力の向上に努めている。

数学科は、少人数指導加配教員を配置いただき、1学年を2～3人で担当している。少人数指導では35人学級を半数に分け、2人の教員がそれぞれ別の教室で学級の半数の生徒に同じ教材を用いて授業を進めるため、よりきめ細やかな指導が可能となっている。

1年生は配置教員数の関係で少人数指導が組めないで、国語科と同じように2人の教員が学年をシェアして担当し、小單元ごとに教科部会を開いて「G-OJT」を進めている。

2年生と3年生については少人数指導の体制を組み、先の説明のとおり、1学年を3人の教員で担当している。週に1回、それぞれが担当する学年ごとに、単元の内容や授業進度の調整等について教科部会を開いている。

社会科は、まず、昨年度のものであるが、研究授業の様子をご覧いただきたい。

#### －「動画視聴」－

動画のような校内外に向けての公開授業を、昨年度は10回以上開催している。社会科のグループリーダーは校内全体の授業改善推進リーダーでもある。経験の少ない教員は、リーダーの公開授業を参観し、アクティブ・ラーニングについても学んでいる。

理科については、シェアする教員二人の経験がほぼ同等の学年で、少し異なる取組を行っている。一人は県の中学校理科部会の観察実験部会長を務めており、もう一人は「滋賀県コア・サイエンス・ティーチャー」の承認教員である。コア・サイエンス・ティーチャーとは、県の中学校理科教育の中核的な役割を担う教員の養成プログラムを受けて認定された教員である。そこで、2年生ではこの二人ともが全クラスを担当し、分野や領域、単元別にシェアしている。例えると、高校の生物や地学、化学や物理の担当のような形に似ている。このように、シェアを担当する教員同士の経験によっては、単純に学級をシェアするのではない形にも取り組んでいる。

英語科では、加配教員を市から配置していただいていることを活用し、1クラスを二人の教員で授業を行うチーム・ティーチングを出来るだけ多く実施するように取り組んだ。チーム・ティーチングでは、二人の教員によって、常に英会話を行うことが可能である。そのため、生徒は1年生から英会話を授業で聞くことができ、このことによって日常的に英語での会話や表現に親しむことができる。

また、生徒は小学校からタブレットPC使っているため、操作に慣れている。そこで、自分で作った英文や資料をもとに、一人ずつが学級全体に英語でプレゼンテーションする授業を各学年で設けている。

#### －「動画視聴」－

プレゼンテーション時にはタブレットを持って、生徒自身が作ったパワーポイントの資料を操作しながら、自分が考えた英文で自信をもって発表している。加えて、本校では「パイオニアスクールくさつ推進事業」を活用して、地域の方に年間を通して英語の授業にはほぼ毎週来校して協力いただき、学力向上方策の一つとしている。

このように人的配置をしていただいている中で、校内で工夫しながら取り組んだ結果、生徒の授業に向かう姿勢が良い方向に変わってきていると感じている。まだ、家庭での学習習慣定着について課題があるが、教科指導の改善が全国学力・学習状況調査の結果にも反映しつつあり、この取組を今後も継続していきたいと考えている。

#### 4. 意見交換

##### 橋川市長

全国学力・学習調査の結果の中で、高位層、中位層、低位層のそれぞれの教科による分析をしていただいたが、その中で小学校の算数Bは高位層が非常に少ないが、これは全国でも同様だという話があった。このことについて、全国がどんな数値なのか知りたい。

また、中学校も数学Bについて高位層の割合が少ない。ここについては、何か苦戦している部分があるということだが、全国との比較が分かれば、あるいは県との比較が分かれば、その点を教えてほしい。

##### 学校政策推進課長

小学校の算数Bについては、県に比べれば草津市の子どもたちは中位層が多いうという結果で、高位層の割合はあまり変わらない。県の数値に比べて中位層の割合は多いということになる。全国平均と比べると、ほぼ同じぐらいの数字になっていると御理解いただきたい。

中学校の数学Bについても、これもほぼ同じで、県に比べれば中位層が多い割合になっているが、低位層が大体50%前後を占めるというのは、全国平均並みという状況である。草津市だけが苦戦しているという訳ではない。

##### 橋川市長

全国学力・学習状況調査の中で、「家で学校の宿題をしている」という項目では、全国よりも高く98.5%となっているが、「家で、学校の授業の復習をしている」という項目では低く、46.7%、あるいは、「家で、予習・復習やテスト勉強などの自学自習において、教科書を使いながら学習している」が、54.9%ということで、こも低く感じる。ただ、家で宿題をしているという割合は高い。これは一体どういうことが考えられるのか。

##### 学校政策推進課長

宿題ができているということは、学校で教師側から与えられたものについては非常にまじめに取り組んで、きちっと提出する児童生徒がたくさんいるということ。ただ、そこにプラスをして、例えば算数の学習や数学の学習で、宿題以外に教科書を使ってもう一度、見直しをして復習をしようということがなかなかできていない。

いわゆる自学自習をしているという部分に、若干弱さが見られると分析している。

データとしても、自分で学習を考えてやっているかという質問では、50%を若干切る数字になっているので、二人に一人は宿題はやるけれども、自分で考えて勉強するということについては若干苦手であるという答えだと考えられる。

**橋川市長**

宿題を増やしたら良いというものではないであろうから、難しい課題である。

**川那邊教育長**

宿題については、保護者のニーズも多様である。たくさん宿題を出してくださいというかたもおられるし、宿題が多くては困るという保護者もいる。例えば、塾とかもあり、そちらの勉強をさせたいという要望もある。学校としてもどれぐらいの分量が適切なのかというのは、非常に難しいところである。

そういった問題もあり、今年から放課後自習広場というものを始め、子どもたちが自分の宿題や、やりたいことを放課後にやってみるという取組を始めたのだが、他市町にはない試みで、子どもたちが自ら学ぶ姿勢を作っていこうという試みである。そのあたりの説明をお願いします。

**学校政策推進課長**

実施校である常盤小学校長にお話を伺う機会があり、放課後自習広場にどれぐらいの児童が参加しているのか確認したところ、全体の児童数が多い学校ではないが、70%近くの子どもが参加して学習している、とお聞かせいただいた。校長自身も児童に声をかけ、家庭の理解も得ながら参加をすることで、自分で考えて学習が出来る子どもが随分増えたというご意見をいただいた。

**橋川市長**

先ほどの南笠東小学校からの発表の中でも、放課後を活用した補充学習に力を入れていただいているということであり、そこに力を入れることで、宿題以外にも、自ら学習していこうという意欲が出てくることを喚起出来ると捉えてよいのか。

**学校政策推進課長**

あくまでも今やっていることは、児童が学校に残り、ボランティアを付けていただきながら、みんなで一緒に勉強してもらおうという環境の提供である。ここからもう一步踏み出し、家に帰って自分で考えて勉強が出来る、そこまで行って初めて自学自習の力になってくるのだと思う。そのきっかけづくりを今、草津市全体で始めることができたということ。

**橋川市長**

今回の分析の資料にはないが、たしか去年は、テレビやゲーム、SNS等の時間が草津は非常に多いという話があったが、その点は改善傾向にあるのか。

**学校政策推進課長**

昨年、3時間以上、テレビゲームやSNSに関わっていたという割合から見ると、10ポイント以上、今年は改善している。

橋川市長

それは学習に振り変わっていると考えて良いのか。

学校政策推進課長

そこははっきり申しあげられないが、少なくとも時間的な部分は短くなっている。

麻植委員

放課後自習広場は、学校の先生がたが自主勉強の効率的なやりかたや、復習の方法を積極的に指導するといった取組ではなく、ボランティアのかたが、生徒らが自習する時間を見てあげるといった取組と捉えてよいのか。放課後自習広場というのがどういうものなのか、もう少し丁寧に教えていただきたい。

学校教育課長

放課後自習広場は、基本的には子どもたちが自分で学習する内容を決めて、読書であっても、その日に出された宿題であっても、いろいろな形で自ら勉強しようという時間の希望のある子たちを対象にして、支援員のサポートが随時入るという形である。

支援員には若干の謝礼をお支払いしており、学校の先生が算数や漢字の読み書きを教えるのではなく、子どもたちが学んでいるところで、疑問があったときにサポートするという体制になっている。

先ほど発表のあった南笠東小学校での独自の取組も、教員、管理職が中心になってはいるが、指導するというよりも、自ら学ぶ習慣付けを目指すものである。

取組を始めて半年たったが、ある学校では今まで全然宿題をしてこようとしなかった子が、放課後自習広場に参加してから、宿題をやる習慣が付いてきたということで、保護者から、もっと時間をとってやってもらえないかという要望もお聞きしている。

橋川市長

こういった取組は平成28年4月から何校で行われているのか。

学校教育課長

今、市の事業としては6校、趣旨が違う県の別の事業で1校となっており、市内全14校の半分の7校で実施している。

橋川市長

事業を拡大すれば効果が出てくるということが、これまでの半年余りの実績でも明らかになってきているように思われる。

学校教育課長

課題と成果を検証しながら進めているが、課題の部分は南笠東小学校からもあったように、下校の安全性を確保することがある。成果の方は、自学自習の力をつけて欲しい生徒に対して、実際に効果が現れていると感じている。

ただ、職員の負担を、なるべく軽減するためにはどうしたら良いかという点で、今も協議しているところである。

#### 杉江委員

放課後自習広場の話題で、南笠東小学校の発表の中に、家庭学習支援というものも出ているが、管理職と教務の先生が指導も含めての下校付き添いもされているというところで、子どもたちの意欲が育まれるにはとても良い取組ではあるが、先生がたの負担については懸念されるところであるので、状況を聞かせて欲しい。

#### 鈴木教頭

残って学習するということになる、どうしても下校に対する支援が必要であり、その部分については、担任だけに負担をかけないように、みんなで手分けして行っている。

#### 麻植委員

先日傍聴した県の総合教育会議の中でスクールガードについて問題があがったときに、近江八幡市では地域のまちづくり協議会などのかたがたがそのスクールガードの部分を買ってくださり、学校だけが負担するのではなく、学区で子どもたちの安全安心を守ろうという取組をされていると伺った。その解釈をもう少し広げることによって、地域の子どもの学力をサポートしてあげようという観点を、まちづくり協議会などの団体等が持っていただくことで、学校の先生がたの負担を改善できるものと感じた。

#### 橋川市長

最近、国ではコミュニティ・スクールを大いに進めているが、コミュニティ・スクールを進めることが、子どもたちの安心・安全を守るだけではなく、学力の向上にも大きく役立っている事例が全国にあると聞いたが、どういうことをやって、どういう成果があがっているかという紹介をしていただきたい。

#### 学校政策推進課長

例えば、文部科学省から発表されている資料によると、東京都三鷹市でコミュニティ・スクールの取組を平成20年度から導入しているが、学校運営協議会が実動組織として学習ボランティアを組織している。それを各学校に導入されている。また、家庭の教育力を向上させていくために、PTAにも強く働きかけをしていることによって、大きく学力の伸びを見せているということが分かってきている。

福岡県春日市の日の出小学校も同じくコミュニティ・スクールの取組をされておられるが、ここは学校のさまざまな支援をしていただく人材バンク制度があり、様々な学習支援の活動を組んでいくことで、学力向上に役立てていくという事例が出ていた。

草津市は今年度から始めたところであり、まだ各学校での学校運営委員会は2回程度行われているところではあるが、学校長の、学校をどうしていくかという意向を委員の皆様へ伝え、こういうことだったら支援ができますよということがようやく今、形になりつつあるところであり、具体的な学習ボランティア支援といったことまでは進んでいないのが、全国の良い事例を紹介することで、その組織を拡大し、より子どもたちに役立つようなコミュニティ・スクールにしていきたいと考えている。

#### 川那邊教育長

草津版のコミュニティ・スクールも、今年始めて、来年度、更に拡大ということを考えている。何人かの校長と話しているが、例えば、ある小学校では、立命館大学と多くの交流、連携があることから、校長が更に立命館大学との連携を進めたいという方針に基づき、交流のある立命館大学のかたにも委員に入ってもらおうというもの。

学力についても、校長が学力をこのようにあげたいと、放課後学習をこうしたいという考えを出し、地域コミュニティの中で一つの課題として動きが出てくれば、それがコミュニティ・スクールの取組であると思っている。

#### 麻植委員

コミュニティ・スクールに大きな役割で関わってくださるのが、まちづくり協議会のかたがただと思っている。ともに地元の子どもの学力向上に向けて、また学力という意味では、貧困の問題も根底では繋がっていると思うので、例えば子ども食堂の取組など、様々な面からコミュニティ・スクールの取組のなかで、各学区で取り組んでいただけたら良い。

#### 学校政策推進課長

コミュニティ・スクールのメンバーとして、PTAの組織は必ず入っており、地域協働合校で中心となって活動していただいているかたや、地域協働合校事業の地域コーディネーター、まちづくり協議会の代表。また、いわゆる学識経験者や地域の校長のOBで今、活動されているかた等が委員になっていただいている。

#### 周防委員

宿題の量は他県に比べて少ないという保護者の意見を聞いたことがある。それが自主性を高めるといふ言い訳といふか、隠れ蓑になっていないかと考えるかたもいらっしゃるし、塾に行っている子どもも多いので、習い事が多いと今の宿題でも精いっぱいという感じもあり、本当に量は難しい。放課後自習広場は、そういう取組があると聞いて、すごくありがたいと思った。子どもたちは家に帰って来たら、親がいてもついついだらけるし、留守番をしている子どもも多いので、お互い勉強しているという環境があるということは大変ありがたい。

下校に関してのことは、先生に御負担をかけるだけでなく、まちづくり協議会などの地域のかたの御協力が得られるのであれば、それは本当にありがたいと思う。

#### 麻植委員

放課後自習広場と、南笠東小学校で管理職がされていた自習との違いについて、教えて欲しい。南笠東小学校でも自習広場はあるのか。

#### 学校教育課長

南笠東小学校では放課後自習広場は実施していない。あくまでも学校独自の取組で、指導者は学校の校長、教頭と先ほど説明があった教員、下校についても関わっているのは教員である。

#### 麻植委員

自習広場に関しては、低学年が参加する形なので、下校は高学年の子どもたちと一緒に帰るということで聞いている。高学年は自習広場はないが、高学年向けの子どもへの学習支援について、何か市で取組があれば知りたい。

#### 学校教育課長

現在行っている取組では、「土曜日学びの教室」と「放課後学びの教室」が小学校5年生から中学校3年が対象、自習広場が小学校1年生から4年生対象の学習支援ということで、切れ目のない学びの支援制度をとっている。南笠東小学校では1年生から4年生という学年による縛りをなくし、中学年から高学年向けに、もう少し学力の基礎的な部分が必要な生徒向けに希望を募りながら、対象者に拘りなく実施している。

#### 麻植委員

現在の取組で効果があがれば、先ほど市長がお聞きになっておられた点が改善していくように思うが、検証のようなことは何かされているのか。

#### 学校教育課長

現時点では、放課後の下校の課題がクリアされておらず、全ての生徒を対象にすることは難しい。学校の教員が、通常の授業プラス放課後まで取り組んでいくことが負担として大きく、必要な子が必要な選択を出来る機会を、市として提供するということが一番良いと考えている。

家庭学習の方法等については、それぞれの学校が基本的に家庭学習のしおり等のものを年度当初に配り、全家庭にはお知らせはしているが、個々のきめ細かい指導は、子どもたちへの日頃の学習指導の中で行っていただいているところである。中学校ではテスト前の対策や夏休みの補習、小学校も地域で学習教室を開いていただいているところもある。

それぞれが工夫をしながら、学力向上に向けて取り組んでいるが、これ以上、学校の教員が時間外に関わっていくという形になることは、避けていきたい。

#### 橋川市長

松原中学校は、すばらしい成果を出しておられると感じた。35人学級を分けて、それぞれが同じ授業をされるという体制を工夫しておられる。

そういった取組について、ほかの学校にどう広めていけるのか、何か考えがあれば教えてほしい。

#### 学校教育課長

少人数学級の編制には教員の数が必要であり、松原中学校では、市から配置されている人的配置と、県の少人数学級指導の加配を最大限活用している。他の学校でも、出来る範囲でしていただいております。効果はどの学校も感じているところなので、人的配置の部分でどれだけ付けていただけるかで、取組を広げていけると思う。

松原中学校の特徴的なところは、一長一短あるが、普通なら学年単位で一人の教諭が担当するところを、敢えて複数の教諭が関わる工夫をしている点である。どの学校でも全て

当てはめることができるかという点、現時点では難しい学校もあるだろう。

#### 川那邊教育長

福井県も同じような取組をしている。通常だと、2年生の数学は一人の教諭が担当するが、2年生も3年生も担当するという点をされている。松原中学校はその福井県の情報なしに、以前からこのシステムを独自に考えていた。これは先生がたの生徒の学力をあげたいという気持ちに加え、加配教員が県からもたくさん付いている学校であることから、可能になったと思う。

#### 麻植委員

松原中学校には多く足を運んだが、教室に入りにくい生徒たちの対応も、すごく手厚くされていると感じている。それも全て加配のかたがたがおられるから出来る場所ではあるかなと思うが、成果もあげておられ、すごいことだと感じている。

#### 杉江委員

今日のテーマは、全国学力・学習状況調査に関わる点ではあるが、授業改善について、本当に手厚く緻密に丁寧に行われているということを感じていただいた。調査結果を活用し、新たな改善の指標を見出しながら、現場で生かしていくことが一番大事なのだと思った。

システムを改善することによって、授業の効果が最大限発揮されているという両校の取組は本当にすばらしく、市長がおっしゃったように、少しでも学ぶべきところを各校に広めていただき、市内各校の取組が充実すると良いという感想を持った。

両校ともICTを使った授業の場面が多く、発表の方法も工夫をされており、分かりやすさや訴えるものがあれば、響くのだなと実感した。本市はICT教育が全国的にも進んでいるが、現場においてICTを利用する中での困難さや課題があれば聞かせていただきたい。

#### 鈴木教頭

最初は、やはりなかなか受け入れられにくいかたもおられたが、今では自然とどの学級でも使われようになってきており、新しい電子黒板が今年の夏に配置されたが、最近では取り合いになっている状況である。ベテランの先生が逆に若い先生に学ぶ機会が多く、若い先生は当たり前のように使っているの、先輩の先生がそれを見て学んでおられる姿も多い。

#### 杉山校長

職員から出てくる声は、授業ごとに教員が変わり教室も変わるので、設置等の作業負荷があることである。今は理科室に1台、英語教室に1台それぞれ固定で置いている。使いたければ子どもたちをその部屋に呼ぶ形で、授業のやり繰りをしてもらっている。中学校の授業形態を考えると、セットされている部屋が幾つかあると、使い勝手がよくなると思う。



#### 橋川市長

I C Tを活用しながら、草津型アクティブ・ラーニングの取組も大いに進めていただいていると思う。課題を自らやグループで設定し、あるいは先生が課題を出し、それを自ら解決することで初めて応用力が育ってくる。全国学力・学習状況調査の結果を見ても、基礎学力は高いが、応用力がまだ低いという課題があり、応用力を伸ばしていくためには、アクティブ・ラーニングは非常に大切だと思うのだが、そういった点の現状、課題はどの部分にあるのか。

#### 鈴木教頭

本校では、授業改善の一環としてI C Tを使うことによって、子ども同士、少人数で話し合わせる機会が増えた。また、I C Tを使って調べ物をしたり、課題を見つけたりとか、そういう課題を更に広げていったりとか、それをまた電子黒板で発表したりとか、なかなか手を挙げて発表できない子どもも、そういうことなら発表出来るということで、そういう面では非常に授業を楽しんでいるという面が見られるようになっている。

#### 杉山校長

先ほど報告させていただいた中で見ていただいた動画は両方ともアクティブ・ラーニングの様子である。教員はデジタルを使いながら黒板にそれぞれの班で考えた課題を書きに来させ、これについてどう思うかということ全員で意見交流し、結論を導き出していくという形で、1時間たつと黒板が全部端から端からまで埋まるといった状態となる。今日、この時間にあなたは何を学びましたかという振り返りの時間を持つようになり、少し宿題をする率があがったと思う。

#### 川那邊教育長

我々が中学校で受けた英語とは少し違うと感じている。オンラインの授業を三つの小学校でさせていただいたが、反応を聞くと、非常に良かったと返ってきた。これから月1回程度、その三つの小学校で行う予定であるが、子どもたちが自分たちで言いたいことを、三つ、四つの文にしておき、それをフィリピンの先生に向かって発信する。ある子は自分の言うことだけ言えて、向こうから質問があったときに全然分からなかったとか、それも有りだなと思う。自分が言ったことが、ナイスとかワンダフルとか言われてすごく嬉しかったとか、アクティブ・ラーニングというのは、まさにそういう授業であって、自分たちが学んだことをいかに加工して、それを向こうに分かってもらえるかということ。A L Tもまた違う授業形式ということで大切であり、オンライン授業も日本人教師による授業も、様々なパターンを作りながら子どもに興味を持たせていけたら良いと思う。

オンラインを充実したらA L Tが要らないとか、そのようなことではなく、貴重な体験として、発信型の学習を子どもたちにさせたいという思いから、この取組は成功だと思う。

#### 学校政策推進課長

実際に現場で見させていただいているが、やはり子どもたちは自分がしゃべった英語が相手に通じるということが何よりも嬉しいと言っている。

同時に、本当に簡単な言葉ではあるが、相手の言葉が分かるということ喜びを感じている。お互いに通じ合えること、しかもそれが遠く離れたフィリピンの外国人と通じ合えたということは何よりの喜びであると思う。

また、一度に全員はできないので、後ろでは交代のグループが待っている。ドキドキしながら待っているのだが、自分たちの番で、前のグループのやり取りを経験としながら、また次に会話に出ていくということが積み重なって行って、子ども自身の中でも、最初、恥ずかしがって話せなかった子が、ちょっとしゃべるようになっていたり、変わっていく様子が1時間の中で見られることが教師としてはすごく嬉しいと言っていた。

#### 川那邊教育長

1回、一人の講師にかかるのは、通信料も含めて2,500円程度だから非常に効率的。そういう体験をした子どもたちが松原中学校に行ったら、更に授業で議論が出来る。

#### 橋川市長

このアクティブ・ラーニングを進めていくと、全国的な傾向として、学習意欲や学力も高くなるようだが、どのようになっているのか。

#### 学校政策推進課長

今回の全国学力・学習状況調査で、文部科学省が発表した資料の中で、アクティブ・ラーニング的な学習をしてきた学校は学力が高いという結果をグラフで示していた。まさにそのとおりだと言えると思う。

#### 麻植委員

子ども家庭課が来られているので、小中学校だけではなくて幼児教育もとても大事であるし、学びをする環境にするためにも、子どもたちの貧困の問題、様々な対策をとられていると思うが、その点を教えていただきたい。

#### 子ども家庭課長

具体的に貧困対策ということについては、まだまだできていないところではあるが、ひとり親家庭については、児童扶養手当の支給やひとり親の就労支援、育児の相談支援などを行っている。今年度はひとり親家庭の中学生の子どもを対象に、子どもの居場所づくり事業もさせていただいている。

これについては、市役所の近くにあるゆかい家、草津学区社協がお持ちの地域支え活動拠点を毎週木曜日、5時から9時までお借りし、市内のひとり親家庭の中学生、今現在、常時、大体8人から9人の子どもたちが来てくれている。6時から8時までの間だが、学習支援やワークショップを行い、一人ひとりが必ずその場所に来れば発言をし、来たときにはチェックインという形で1週間にあったことや嬉しかったことを話す。また、最後までチェックアウトということで、今日1日体験したこと、思ったこと、感じたことを必ず一言話をするという方針で活動している。

また、食事を提供しており、料理のボランティアが8人、9人いて下さっているが、常時、2、3人のかたが来ていただいて、食事を作っていただいて、一緒に食べる。最後は

一緒に片づけもやるということで、子どもたちに学習以外の体験をしてもらっている。

**麻植委員**

学校との協力体制や、小学生が対象ではない理由を聞きたい。

**子ども家庭課長**

今回、あくまでモデル事業として1か所で実施しており、市内の子どもたち全員を対象者とする中で、送迎などの問題を考えると、一人でも来られる中学生に限定している。

学校との連携については、なかなかできていない状況である。ただ送迎など、親御さんが協力的であり、少し安心した部分はあった。ひとり親独特の課題や経済的な事情、また学校であった嫌なことなど、そういった部分を支援者の学生や団体に拾ってもらって、整理して学校にも情報提供するなどの形で連携をさせていただければと考えている。

**麻植委員**

まちづくり協議会でも展開していただくと大変嬉しい。健幸都市草津と市長も言ってくさっているの、高齢者の健康だけではなく、子どもたちも含めた観点で捉えていただくと嬉しい。よろしくお願ひしたい。

**橋川市長**

中学生の改善をしていかなければならない点の中で、読書が好きだという点は相変わらず低い。毎年、中学校はなかなか上がらないことが課題だったと思う。この原因をどう捉えているのか。また中学校の学校図書館の開館の状況と小学校の状況も参考に教えていただきたい。

**学校政策推進課長**

小学校については、本年度、働きかけを行った成果があり、14校中13校については、ほぼ毎日開館が可能になっており、あと1校についても、この夏過ぎ当たりから校長、教頭に御協力いただき、ほぼ毎日開館が出来る状況になっている。中学校については、昨年度のデータではあるが、6校中2校だけが毎日開館をしており、他の学校については毎日、開館出来てはいない。その原因の一つは、中学校に関しては、生徒指導上の問題があり、学校司書等が行っていただいたり、ボランティアのかたも行っているが、どうしても先生と一緒に付かないと安心して図書館の開館は難しいという状況でもあり、そのあたりをどう改善していくかということが課題である。

本が好きだ、読書が好きだという生徒について、どう増やしていったら良いのかということについては、有効な手立てはないが、市立図書館とも御相談させていただいている中で、良い本を紹介していくとか、例えば小学校を卒業する際に、小学校の卒業生に文庫本を1冊渡し、大人として読んでいくということで、いわゆる読書デビューをさせるという取組が必要なのではないかと考えている。現代の子たちにとって、本というものに対して興味関心を持たせるのには、そういった対応も必要ではないかということを思っている。

**橋川市長**

テレビを見るよりも本を読む方が脳にとって大きな違いが出てくるし、アナログとデジ

タルと両方のハイブリット授業を展開するというからには、読書教育が非常に大事であるという思いで毎年言っている。地域からの支援や、先ほどのコミュニティ・スクールなどの連携の中で、地域の高齢のかたがたの支援などにより、開館日を増やすなどの工夫はできないだろうか。

#### 学校政策推進課長

小学校で読書ボランティアをされていたお母様がたが、自分の子どもたちが中学校にあがったときに、一緒に中学校の読書ボランティアに行ってくれたら良いのだが、実はそうではなく、そのまま小学校で読書ボランティアをお続けになるというパターンが非常に多い。そのあたりについては、今日、杉山校長先生に来ていただいているので、中学校の学校図書館の実態についてお話をいただきたい。

#### 杉山校長

なかなか苦しいところである。本校では、毎日開館というところまではなかなかいけていない。ボランティアのかたに来ていただいているが、人数の面でフル体制で回していただいて、週3日開館できている。毎日開けられるように、秋の読書週間を迎えての10月は学校だよりで読書週間を周知し、生徒たちの読書感想文の紹介を放送委員会で流したりはしている。

朝の帯時間で朝読書も実施している。本を読む子はどんどん読む。好きな子は放っておいても、要するに素地は作られているので、よく読書をする。読まない子を中学校の時点で新規で開拓することが非常に難しいので、伸びにくいという傾向ではないか。今まで読書をする習慣がなかった、また、読書経験も、学校で読んだことしかないというような子たちに対してのアプローチは非常に難しいので、数値的には伸びにくいと思う。授業の中で、ビブリオバトルという書評合戦を国語科で取り入れたりもしているが、結局その時だけになってしまいがちではある。

#### 鈴木教頭

小学校では毎日開館している。ボランティアのかたも多く来ていただいております、テストが早く終わったら毎日、隙間読書というか、机の横にかばんをつり下げておき、そこに読みたい本を入れておく。そういった時間に読むので、読書好きな子どもは結構多く感じる。

#### 麻植委員

市立図書館の館長も来てくださっているのですが、この間まで6年生だった子が中1に行った途端に読まなくなってしまうといったことや、今、杉山校長からもあったように、読まない子を開拓していく必要があるということで、6年生までに読んでいる本と違うのか純粹に疑問を感じるのだが、草津の現状、子どもたちへの読書貸出率をお聞かせいただきたい。

#### 図書館長

今、委員がおっしゃったように、学校図書館の部分で、中学校は、生徒指導上の問題でなかなか開けづらいということは学校現場の先生からお聞きしている。逆に小学校のとき

は、毎日開館されていた小学校の子どもたちが、中学校に上がって週3日とか4日の開館になってくると、やはり行きたいときに行けない。本を読む子はそういう意味では毎日行きたいのに行けないなと感じている子どもがいるということは聞いたことがある。

ただ実際、現場の先生がたが、生徒指導上、書架の陰に隠れて問題行動、いじめなどに発展すると危惧されているというお話を聞いている中で、市立図書館の方に来館していた小学生が、中学生になると来館が途絶えるのは部活や受験などが原因かと予測されるが、市立図書館としては若い子向けのコーナーを中高生向けに設置するなど模索しているところである。

来年度の事業計画もそろそろ組み立てる時期ではあるので、学校政策推進課と協議した中で、中学校の毎日開館がなかなか難しいということであれば、本の紹介やブックトークなど、授業ではなく昼休みなどに市立図書館が出向くことを仕掛けてはどうかと考えている。恐らく予算もかからず出来る範囲なので、現場の学校とは今、調整しており、そういう形で少しでもきっかけを作っていくことが大切だと考えている。

#### 川那邊教育長

読書感想文を出せと言う課題がある。それも上から出せと言われて、何を書いていいかわからないまま。つまり、読書に魅力が持っていない。そこをうまく改善していくためには、図書館部会でも一生懸命やっただけではないので、そこに期待したい。

もう一つ、読書が好きだった子は入試問題の国語の現代文を読むのが楽しいと言う。入試のときにどんなことが書いてあるか読むのが楽しいと言う。本来の読書の楽しみというものを感ずるために、ビブリオバトルも含めて、本市の読書活動推進のありかたを改善していかなければならないと思っている。

#### 杉江委員

幼児は絵本が大好き。毎月でも読んでほしい。朝も帰るときも。最近では会社でも社員のストレスの解消や、心を落ち着ける時間のための大人向けの絵本もあると思う。中学生や小学生もきっと絵本は大好きだと思う。文字ではない絵本で感じる部分、そういう感性みたいなものは大事だと思う。

#### 橋川市長

南笠東小学校の話の中で、学習態度は落ち着いていて、学びの七つの心がけということで、素晴らしい心がけを全校共通で標語にして実践をされているなど思ったが、学習態度が落ち着いているのが全ての学級なら良いのだが、果たしてその点が教育委員会の捉えかたとしてどうなのか。授業の時間に動き回ったり、お互いにしゃべって先生の話をしっかり聞かないなど、特に1年生にあると思うが、まず学習態度は落ち着かせ、しっかりと先生の話の聞くところからスタートしないといけないと思うが、そういった点の現実と、それに対する取組はどうなっているのか。

#### 学校教育課長

昨年度末、市内のある小学校で、教育委員会からも少し支援をしないとイケない状況に

あった学校はあるが、今年はそういった状況はない。市長がおっしゃるように、学習規律や子どもたちの仲間づくりは全ての基盤となるので、勝負は1学期。特に4月、5月の取組からのスタートであり、今、2学期を迎えて、そのような状況で学級としてちょっとしんどいと聞いている学校は2、3あるが、それぞれの学校の取組の中で改善をしていってもらえる範囲内だと考えている。

時期的な面ではいじめの部分も9月、10月に1回ピークがあり、年が明けて学年末当たりに崩れた年もあるので、そのあたりは十分注意し、学校と連携しながら取り組んでいきたい。

#### 橋川市長

調査結果では、いじめに対する子どもたちの認識は非常に高いという結果が出ているので、この部分はこれからも維持をしっかりとっていただきたい。

先ほども出ていたが、先生がたの業務負担が重く、その負担の軽減をもっとしなければいけないとの声もお聞きをしているが、どういった点の業務負担が多く、どのようにすればこの負担の軽減がされていくのか。単に人数に増やすというのではなく、今は校務支援システムも導入されていると思うが、それらの効果も出ているのかどうかも含めて、今後、どう展開していくのか。

先ほどから、授業が変われば子どもが変わると何度も話に出ているが、授業が変わるためには、先生に時間がないとできないので、そういった意味からも負担軽減についての取組なり、展望なりを教えていただきたい。

#### 学校政策推進課長

市長がおっしゃったように、教師の業務負担になっている原因としては、新聞で大きくまとめられていたように、4点ある。

まずは部活動、そして良い授業をするための深い教材研究。これらは、絶対必要なことではある。それからもう一つは、子どもや保護者に対する丁寧な対応。さまざまな価値感のお子さんなり、保護者がおられることに対して、いかに丁寧に対応していくかという部分。4点目が、国や県から出てくる調査や、自分が持っている事務や成績処理など、事務全般にわたっての処理。この4点が教師が業務負担として時間をかけてやらざるを得ない部分となっている。

今、教育委員会では政策監を中心に、各課の合同チームを立ちあげて、調査を少しでも減らせないか、校務支援システムを使ってどれぐらいの時間を軽減出来るかなど、様々な角度から取組を進めているところである。校務支援システムについては、小・中でばらつきはあるが、一人あたりの教師に対して、年間最低でも50時間ぐらいの時間の軽減は可能である試算している。また、校長、教頭、教務など管理職系が担っている役割についても、100時間近くの軽減は可能であるということも試算している。ただ、本年度から本格稼働しており、何事も最初は手間がかかり、マニュアルを読む時間も必要であるが、来年度、実際に軌道に乗れば、試算した程度の時間軽減が図れると考えている。

今、本市では学校に対してたくさん人を付けていただいている。例えば、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラー、すこやかサポート支援員とって教職免許を持たないが、新しく入った1年生に細かく対応していただける人員の配置などをしていただいております、それらのかたがたの活用方法について更に改善していくことによって、何も無い市町に比べれば随分負担が軽減していけるものと捉えている。

## 5. おわりに

### 橋川市長

今まで御意見を多くいただき、私も意見を述べさせていただいた。やはり放課後等を活用した補充学習をもっと展開し充実させていくということが大事だと感じたこと、また、少人数による授業の充実も今ある人数の中でどこまで出来るのか、できない部分について、どう対応するのかというところを提案もいただき、更に手厚い子どもへの対応を出来るようにしていかなければならないと思う。

思考力、応用力を高めるためには、アクティブ・ラーニングがスタートをしたところがあるので、これを大いに進めていただきたいということと、読書についても、なかなか進んでない部分もあるものの、応用力、思考力の面で大切であるので、ここについての取組もお願いしたい。更には、委員からも出ていたが、地域との関わりをより充実をしていくということで、地域協働合校の取組も踏まえながら、今言われているコミュニティ・スクールを更に充実させること。その中には、PTAやまちづくり協議会、グループもあり、幅広い層に学校の教育に関わっていくように展開をしていただきたいと思います。

最後には、先生がたの負担軽減、今も取組を進めていただいているが、事務や保護者対応の負担は軽減しながら、子どもと向き合う時間を増やしていただいて、授業が変われば子どもも変わるという、先生がたの取組がより一層進むよう、市を挙げて進めていくことを改めて私としても認識をした。教育委員会と市長部局が連携をより密にして、今後の学力向上に向かって、生きる力の向上に向かってがんばってまいりたいと思う。

### 川那邊教育長

今、市長が丁寧にまとめていただいたが、この間、この全国学力・学習状況調査を受けて校長会でもお話をしたことがある。草津の子どもたちの学力の向上のために、今まで実績があがった学校を見てみると、二つのことがあるといったことである。

一つは、基礎基本を繰り返し繰り返しやってきた学校が伸びていること。今日の例でいうと、南笠東小学校の成果には、校長や教頭の努力、繰り返し繰り返しやっていくということがあると思う。

もう一つは、松原中学校がやっておられた、学んだことを自分で加工しながら、それを表現したり、発表したり、発信していくという学習の仕方である。この二つをしっかりとやっている学校が伸びているというデータも出てきており、草津市内でもそのような傾向があるので、これらをしっかりとやってくださいとお願いした。

事務局には、今、草津では人的な配置をかなりいただいているが、今ある人的予算をもう一回、今の時代、学校にふさわしい形に組み替えてほしいとお願いした。毎年いただいているから同じような形ですのではなく、その時代に合った、あるいは教育の流れにあった組み替え、見直しをしていく必要があるので、その点を十分お願いしたいと考えている。

## 6. 閉会

教育総務課 太田課長が第3回総合教育会議の開催について連絡

橋川市長が閉会を宣言